
大佐の放課後

有村ユカ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

大佐の放課後

【Nコード】

N0355A

【作者名】

有村ユカ

【あらすじ】

大佐の仕事を部下達に押し付けていた大佐だが、大佐のひよんな行動から大変なことに…。ギャグものストーリー！。

放課後一限目。

『やあつと終わったあ』力ない声でへによへによと倒れこんだ人物はロイ・マスタング。

地位は大佐で焰の二つ名を持つ国家錬金術師だ。

ロイは先日から溜りにたまっていた事件の書類を整理していて、今終わったばかりだった。『全く。一体誰のせいでこんなことになったんだろうなあ？大佐ア。』睨み付けながらにやりと笑う人物はジヤン・ハボック。地位は少尉でロイが東方司令部にいたころからロイを慕っている人物の一人だ。

ロイは遠い目をしつつも、冷や汗をたらたらと流しなら苦笑いを浮かべている。

『ほんと。こんな問題児を上司に持つと私達が苦勞するわ。』深くと長い溜め息を意地らしく吐いた人物はリザ・ホークアイ。地位は中尉でこの人物もまた、ロイを慕う人物だ。『人を子ども扱いするでないっ！』だんっ、と書類が山積みになっている机を思いきり叩いた。

当然、きちんと分けられていた書類は床にバラバラを音を立てて落ちる。

ロイがまたも力ない声を出して頭を抱える。

リザはふう、と浅く溜め息を漏らして、ロイをにつこりと微笑みながら見る。

ロイは背中辺りに異常なまでの冷や汗を滝のように流れるのを感じた。

その直後、ガチャっ、と機械のような音を聞いた。

口には異物が在る。

そうそれは、リザの愛用のピストルだった。

『大佐？お昼から今までの労働時間を言ってもらえますか？』にこにこしているが、リザの口元には右上がりに引きつっていた。

『まっ…中尉…っ!!』言葉が途切れ途切れにしか出せないジャンを横目に、リザは続けて問うた。『大佐っ!!! 貴方は一体何回部下に迷惑をかけるつもりですかっ!!!』ガチャガチャと口の中でガタガタ動かされるロイ。

『もがっ…もふうっ!?』もがもがしか言いようがないロイに、リザはまたもキレる。

『何言ってるか分かりませんよ!?』今度はカチリ…ともう今にも撃つ気満々な体勢になっているリザを、ジャンは必死に止めようとするが。

『中尉っ!!! おいつ…落ち着けて…』言い終わると同時にリザの空いてる手からもう一丁、ピストルが出てきた。

それをリザはジャンの額にゴリ…と当てた。

ジャンはピストルに気付き『ぬあゝあーっ???!!!』腹から声を出した。

『ハボック少尉!!…ここで私に齒向かうつもりなら受けて立ちますよ。』にやりと笑いながらジャンを見た。ジャンは青ざめながらリザを見つめ、引きつった笑みを浮かべた。

『…すみません。』

大佐、お助け出来ません…』泣きながら手をフラフラ挙げて降参の真似をしていた。

リザはそれを見てにつこりと女神のような微笑みを作っていた。

が、それはロイから視てみれば悪魔の微笑みをしたリザのすがたでしか見れなかった。

リザはロイの顔を見て、『さあ大佐。』

この落とし前は大佐お一人で着けて下さいね』そう言ってピストルを口から抜いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0355a/>

大佐の放課後

2010年10月9日12時17分発行